

沖

俳句雑誌[おき]

7月号

沖 発行所

海

光

能村 研三

吟行会の手帳

先師登四郎は吟行の時は、手帳は持たない主義を貫いてきた。総合誌の撮影の時も「手帳を持ってください」というカメラマンの注文に「何故俳人と言つとすぐ手帳を持たなければならぬのか」と反論していた。したがって先師の手帳を持った姿は殆どない。

吟行していて、いろいろな素材を目にした時、忘れないようにすぐにメモを取る人がおられるが、先師は忘れてしまふようなことであれば、まだ自分の身につけていないことなので、無理に覚えておく必要はない。本当に自分の心にしつかりと焼きついたものだけに作句をすれば良いと言つていた。

この先師の考え方はある意味では理解できることであるが、私は初心者には手帳を持つて、こまごましたことをなるべくメモをとることを勧めている。突然閃いたことでも人間の記憶は完全でなく、どこかへ消え去つてしまふこともある。先師は記憶力では人に負けないほどすばらしかったが、私などは記憶力に自信がないのでメモに頼ることにしている。

一時「人事句の沖」と言われた時期もあつたため、吟行を奨励する意味で、

六十路にてそこばくの立志今年竹

分け入りてあかざしろぎを踏みしだき

年号の昭和換算合歡ぐもり

ぬけぬけと仮想敵手と酌む冷酒

行くほどに見えなくなりぬ雪解富士

佐久鯉を筒切りにして洗ひかな

元も子もなき雨乞ひに酒が出て

海光や潮の香締めの大茅の輪

屋上のみどりくまなく喜雨来る

梅雨寒や備伏せに寝て想浮かぶ

東京例会では一年に二度の吟行会を設ける習慣をつけた。

吟行の話では、水原秋桜子の「潮来十二橋」が有名である。

濯ぎ場に紫陽花つとり十二橋

と詠まれたのを記憶していた東大俳句会の人達が、数年後同じ場所での吟行で、その場所を探してもどこにもないという話があった。秋桜子は「私は、自分の見た紫陽花が幻影であったとしても、それで少しも差し支えはないのである」と答えた。

この話は、やがて「自然の真と文芸上の真」を発表して高浜虚子に異を唱えたことにもつながる。虚子の写生は自然の真に従っているだけだが、俳句において大事なものは自然の真ではなく文芸上の真だ、というのがその主旨。林翔は初学俳句教室において、「俳句は報告書ではない」「俳句は芸術と創造。今までに無かつた新しいものをはじめてつくり出すこと」と言っている。先師の「手帳」の話といい、水原秋桜子の「潮来の十二橋」の話といい、林翔の「俳句は芸術と創造」と説いたことに何か共通するものがあるようだ。間もなく勉強会が開催されるが、どのようなか出てくるかが楽しみだ。

蒼茫集



花菜越え

望月晴美

葬といふ不思議な活気水木咲く
まなじりを去らず黄蝶の花菜越え
蝶去りて風なんとなく軽くなる
春の潮心に満ち干あるやうな
春の風邪皆勤賞をうばひたる
なんぢやもんぢやの森なす茂りとは涼し

肺活量

宮内とし子

五月来る肺活量のありつたけ
鯉のぼり棚田の景の動きたる
SLに貴婦人とあり余花の雨
葉桜となりて威風を保ちをり
くるぶしのむづ痒くなる新樹の夜
銀ぶらと洒落るもよかれ更衣

好きで嫌ひで

辻美奈子

清明や躰をほどくくるま鬘
下町が好きで嫌ひで祭髪
悪態もつけぬ母の日来たりけり
母の日の何のあてなき花を買ふ
母の日やこんな青い空があり
くるぶしを過ぐる風あり麦の秋

ポルシェ

千田百里

歌舞伎落し

玉三郎に会ふため化粧ふ春の暮
さくらんぼ二つ三つ四つ予後よろし
江戸つ子の登四郎・鷹夫祭来る
逃水にきりきり舞のポルシェかな
逃水に身ぬちの水を攫はれし
清濁の濁が大切海鞘を割く

脈 拍 林 昭太郎

風光り土は回つて壺になる
包帯の中の脈拍新樹の夜
みどりの夜ビオラ疾走チェロ追走
船室の丸窓に波五月来る
夕焼をつかまへにゆく石鹼玉
無料誌の街に溢れて街薄暑

登退場 甲州 千草

十五歳頃の野に会ふかたつむり
校門の鉄扉の轍走り梅雨
靴紐の取り換へるころ栗の花
をとこ一人泪もろくて夏大根
舟虫の登退場の早ぢから
宅配や忘れ日傘の海より来

一 閑 遠藤真砂明

ぼうたんに天地一切開け放つ
波いきいきと朝市の鯉のぼり
もつと生きよと母の日の遠き母
地震のあと春夕焼の散華かな
病み慣れて昼寝暮しのふてぶてし
夏つばめ一閃われの胸突くか

経木包み 田所 節子

巢箱かけ櫂の葉影濃くなりぬ
八十八夜コロツケ俵積みにして
初夏の経木包みの菓子ひらく
龍神龍神にての崖下りゆく白い靴
海中の暗さ見て来し海女の笛
桶に凭り息ととのふる若き海女

とんでもない高さ 久染 康子

提灯の蛇腹ばりつと祭来る
噴水のはじめとんでもない高さ
手庇で仰ぐ信号街薄暑
裏庭の湿りに灯る野性枇杷
青ぶだう未完の円の犇けり
かさぶたの下はもも色夏に入る

一角獣 北川 英子

麦秋に屈みてひそと父祖の声
土に命いま生る窯火春深し
恙なき寝息に隣り緑雨の夜
更衣一角獣に逢ひたくて
夕虹をくぐりし心湿りとも
カーナビがお疲れ様と春の暮

帆 岡部 玄治

蝶もつれ光をこぼす父母の墓
生前のやくそく桃の花ひらく
揚ひばり姫神山の裾を踏み
海原の帆もかくあらむ桂若葉
鎌の刃にひかり葉桜さやぐとき
緑濃くなる誰も還る地を鎮め

関 門 千田 敬

母の日と思へば額に雨粒が
楠若葉ひと夜柩の衛兵われ
衣更へてもと言ひたげな膝頭
夏風邪のオーボエめける妻の声
藪知らず幽霊棲むに狭すぎて
老境に関門のなしなんぢやもんぢや

朴不壊に 秋葉 雅治

富士塚は町内遺産風かをる
陰にしては笛の音高き宵祭
藤老ゆる時間の束の降るやうに
かたつむり篆字のうへをなぞりゆく

神鶏先師三賢の誇り忘れず羽拔鶏
江戸の粹能登のなさけや朴不壊に

櫓も櫓も 荒井千佐代

菜の花や照らし合ひみる海と空
渦潮の巻きを強めて復活祭
白昼や海へ逃げ水追ひつめて
櫓も櫓も乾ききりたる百千鳥
矢車や一湾に日のゆきわたり
恰好の朧夜ならむ逢ひにけり

三角兵舎 工藤 節朗

散る短歌さくら三角兵舎の土間流れ
朝風へ発ちたる不備の戦闘機
花筏はたち前後の吾さがす
歌は人を煽りし同期のさくらかな
花の散る庭に学びて死に発てり
万緑に生死をかけしこと忘れ

五段積み 吉田 政江

早苗箱五段積みして車着く
植田はや風の洗礼受けにけり

小流れのひびきへ著莪の傾れ咲き
竹皮を脱ぐ節ぶしのひすい色
馬走り跡とふ坂の花楓
竹林へ牡丹疲れの眼を移す

学 帽

大川ゆかり

蝌蚪の紐いのち混乱してゐたる
文字盤の掠れし時計春の昼
清明の我が身つらぬきゆく風よ
青空や電波避けつつ燕飛び
何故といふ子の目きつねのぼたんかな
桐の花学帽廢れてしまひけり

空に水音

頓所 友枝

太陽の寿命うかがふ蜃気楼
みどりの日家を丸ごと洗ひたし
珈琲はブラック憲法記念の日
鯉幟空に水音生まれけり
アンテナを南南東に夏隣
青葉雨追ひ焚きボタン二度押しす

瞬の静けさ

細川 洋子

海光眩し一閃のつばくらめ

みづ押され瞬の静けさ滝となる
縦横に全集古書ウインドー薄暑
春愁の何にでも塗るオロナイン
春深き千円札の畳皺
うぐひすの言葉尻なら許されよ

序の 笛

松井志津子

序の笛の潮騒を截つ薪能
玫瑰や埋もるにまかす砂防垣
岬鼻に片手抑への夏帽子
行く春の谷に撓める送電線
ひねもすを素足で通す昭和の日
父と子の電話短かし宵涼し

聖 五 月

森岡 正作

神域に上りつめたる山桜
指笛のテネシーワルツ聖五月
たかななの相州人の貌持てり
五月鯉夢見る南南東の風
六階に青葉若葉の鬨の声
ネクタイを解き炎帝を一瞥す

潮鳴集



接吻 今瀬一博

すらすらと出てくる校歌若葉風
牡丹園狭き門より入りにけり
ぼうたんの百花百の名競ひけり
白牡丹接吻のごとのぞき込む
覚めぎはの夢の色とも白牡丹

風の切れ味 安藤しおん

連弾のかひなのクロス薔薇開く
呼鈴のあと一步退く夕薄暑
夏つばめ風の切れ味良きところ
悼みの墨沙羅の花より淡く磨る
脱ぎ際を風の囃して竹の皮

こどもの日 大森春子

単線で花の遅速をたのしめり
行く春をぱくりぱくりと緋鯉かな
ルーキーの完投ならず啄木忌
石段も土管も楽しこどもの日
訪ね来てここが原点麦の秋

絮たんぽぽ 関洋子

緑摘む時をり眼遠くせる
夏近し水音を聞くに手を当てる
薄暑かな東京湾の潮匂ひ
絮たんぽぽ吹かるるによき丈となり
山水画朱印押されてより涼し

沖作品



能村研三選

嘯やときめき何時も未然形

千葉

峰崎 成規

矢車やからから風の夜を紡ぐ

不即不離妹と背の間を春は行く

青嵐Tシャツのロゴじつとせず

真青なる空に燕尾の筆跳ねり

追伸の言葉あれこれ花万朶

郵袋のふくらみ島の海女の分

階に水仙競ふ村起し

花屑をつけて中古車華やぎぬ

春筍や峡の一戸の煙出し

膳本の加筆四行春寒し

絶壁に挑む登山部つつじ燃ゆ

国防の町を明るく花水木

農道を獣の渡る穀雨かな

石川

我門 行男

長崎

水木 沙羅

糸を縫る手の中にある薄暑かな

透明の中に銀の眼しらす漁

メロン甘し涙の形の種いくつ

鳶鳴くや成層圏まで夏の雲

青嵐ビルの迷路で加速せり

花吹雪チャイムが子らを放ちけり

似るものの万の極みや目刺干す

臨終の手の風船を離すと

わが吐息充して風のしやぼん玉

能面の静けき汗のありぬべし

せせらぎは村の音とも花葵

子子のダンスは水のリズムから

涙干すための疾走青田道

馬に会ふ山滴りのつづら折れ

けふはなんだか化粧が濃くて立夏

東京

平松うさぎ

神奈川

大矢 恒彦

千葉

馬場由紀子

沖作品 15句選評

*
能村研

囀やときめき何時も未然形 峰崎 成規

未然形とは、「未だそうならない形」ということで、文法的には、たとえば「飛ぶ」を例にとると未然形は「飛ば」「飛ば」のふたつで、「う」は後者の形「飛ば」にくつついて「飛ばう」となる。つまり、「飛ばう」は「飛ぶことは確定だけでもまだ実行していない」の意味になる。物事がこれから発生する場合が未然形ということになる。何事にもポジティブな人は、いろいろな場面に遭遇しても、これから起りうることに不安を抱えながらも、それをときめきとして受け入れようとする。囀を聞きつつも作者の前向きな姿勢に声援を送りたい。

郵袋のふくらみ島の海女の分 我門行男

作者は能登輪島に住んでおられる方だが、能登のはるか沖には舩倉島がある。漁獲期のピーク時には海女等の漁業関係者が

三百人ほど生活する。ここは豊かな天然礁が広がっており、古くから漁業が盛んな所だ。海女の数は世界一を誇り、古い歴史と伝統の漁師町、鮑の漁場でもある舩倉島は海女の漁で知られる。島で暮らす期間中の海女への手紙は輪島から定期船で運ばれる。舩倉島行の郵袋の大きさに作者は海女たちの暮らしぶりを想像した。

国防の町を明るく花水木 水木 沙羅

最近では日本も隣国との国境の問題で、尖閣列島や竹島の領有権が報道される。島国の日本は陸地での国境はないものの、四方の海は国防的にも重要な役目を持っている。長崎県の佐世保市は昔から軍港があり現在も自衛隊の駐屯地がある。国防と造船の町として知られている。私も佐世保には何度か行ったことがあるが、町に近づくくと突然灰色に塗られた軍艦がひしめきあう軍港の風景が目に見え込んでくる。そんな町を少しでも明るく平和にしたいと街路樹には花水木の花が咲いていた。

糸を縫る手の中にある薄暑かな 平松うさぎ

絹の糸を縫る作業であろうか。細い光沢のある糸に、女性の繊細で機敏な手の動きがからんでいる。清らかな手でどんな絹糸をたぐり出し時間をかけて縫られて糸になる。こんな繊細な仕事であっても、作業中は真剣で手に汗を握る緊張が続く。作者はこの作業をつぶさに観測し、手の中にある熱を薄暑として捉えた。(以下略)